

「わたしが作りたい教室」とその変容

高須 こずえ

1. 序論

1.1. はじめに

早稲田大学大学院日本語教育研究科の授業の一つである「日本語教育実践研究（1）」では、授業を受講している大学院生によって「にほんご わせだの森」（以下、「わせだの森」という日本語の教室が設計・運営されている。筆者は2012年度春学期の「日本語教育実践研究（1）」の授業を受講し、「わせだの森」の設計・運営に半年間携わった。当該授業を受講した理由は、教室の理念やカリキュラム、参加対象者、活動内容等を受講生自らが考え設計できるという点に魅かれたからである。今までに筆者が関わってきた日本語教育の実践とは違った新しいことができるのではないかという期待を持っていた。そのような思いから「わせだの森」の運営に半年間携わり、その過程で自分の言語教育観、教室観を見つめなおした。

1.2. 本稿の目的

本稿では、筆者が今までの日本語教育の経験から「わせだの森」においてどのような教室を作りたいと思っていたのかを明らかにする。また、「わせだの森」の設計・運営に携わる中で、当初考えていたつくりたい教室はどのように変化していったのかを示し、今後どのように生かしていくかを考察するきっかけとする。

1.3. 「にほんご わせだの森」について

「わせだの森」は、2006年度から早稲田大学大学院日本語教育研究科の授業の一環として行われている教室である。科目を履修している大学院生（以下、実習生）が、教室の理念や対象者、日程、活動内容などを決め、自ら参加者の募集を行い、実施している。2012年春学期の「わせだの森」は、筆者を含む7人の実習生によって設計・運営された。教室は、2012年5月から7月まで隔週の水曜日・土曜日に計10回実施された。「わせだの森」の参加者は、予約や事前連絡の必要はなく、来たい時に直接参加することができる。国籍や職業、年齢、日本語のレベルは問わず、日本語を話す人であればだれでも参加できるとした。各回の詳しい内容については、本誌掲載の松本・角浜（2012）の実践報告を参照されたい。

当該授業の実習生は、まず4月に「私が作りたい教室」という事前課題を提出した。そして、それぞれが提出した「私が作りたい教室」をもとに話し合い、共通理念を「つなが

りをつくること」とした。さらに、それぞれの考える教室をより具体的に示すために「わせだの森 デザイン案」を改めて提出した。そして、実習生のデザインをもとに「インターネット」や「本」などのトピックを抽出して各回のテーマを設定し、さらに子ども向けの「ちびっこ わせだの森」と「森の相談コーナー」を設けることとした。

各回の活動内容は、各回のテーマと「つながりをつくる」という理念をもとに、7人の実習生でメールのやりとりや話し合いを通して決定した。実際の教室運営も、実習生がファシリテーター、受付、記録などを分担し運営した。毎回の教室活動終了後、担当教員と実習生が活動内容の振り返りを行った。この振り返りには、教室の参加者が参加することもあった。

このように、実習生は活動の設計、実践、振り返りを繰り返し、その中で活動の内容や共通理念、自らの教育観の内省を行った。特に、共通の理念である「つながりをつくること」は、4月の時点では、「友達をつくること」や「人とつながる」という認識であったが、実践と内省の繰り返しを通して、「人とのつながり」だけではなく「日本語と自分のつながり」もあるという考えに変化した。

2. わたしの教室観

2.1. 調査方法

上に述べたような、実践と内省の繰り返す中で、筆者は今までに持っていた教室観が明確化していくことを感じた。本稿では、「わせだの森」を通して、筆者が考える教室観についてデータをもとに分析、考察を行う。使用するデータは、2012年4月提出した課題「私が作りたい教室」と「わせだの森デザイン案」、及び話し合いと振り返りの議事録である。

2.2. 分析・考察

2.1.1. 活動開始時に考えていた教室

自身の教室観を振り返る上で、まず、最初に2012年4月17日に提出した「私が作りたい教室」と4月30日にメーリングリストで共有した「わせだの森 デザイン案」の分析から始める。この2つのデータは、筆者が受講当初どのような教室を作りたいと思っていたのかを示している。

既に述べたとおり、「私が作りたい教室」は、「わせだの森」の受講を決めた受講者が提出した事前課題である。この中で筆者は以下のように書いている。

「私が作りたい教室」について

1. インターネットなど日本語のリソースから自分の興味あることを調べる。
2. 自分が調べた情報を実生活で利用したり、教室外でも積極的に情報を得られるようにする。
3. 他の学習者と共に活動したり、自分で得た情報を共有したりして交流する。

(2012年4月17日提出 事前課題より一部抜粋)

1の下線の部分より、筆者は、教室内で行う活動はできるだけ参加者の興味に沿って行うことが重要だと考えていることがわかる。また、実生活（教室外）で利用できるような実用的なものを得てほしいという考えもある。他の学習者と共に活動する、交流するという点においては、日本語の教室の構造としてよく見られる「教える一教わる」という形ではなく、参加者同士が対等な立場で交流できることを目指している。

これらのことは、4月30日に具体的なデザイン案として提出した「わせだの森デザイン案」にも示されている。

「わせだのもり」デザイン案

テーマ：インターネットの活用（SNS、料理など）

目標：①インターネットで情報を得る

②得た情報をみんなで共有する

③得た情報を外でも活用し、実生活に役立てる。

内容：(省略)

<デザインした理由や目的>

- ・ 留学生、地域の人、日本人、旅行者 誰でも参加できるような活動
- ・ 参加者が何かを得た実感を持って帰ってもらうこと
- ・ 自分の興味のあることで他人とコミュニケーションをとる、友達を作る
- ・ 勉強ではなく楽しく活動できること

以上のことから、インターネットで興味のあることを調べながらおしゃべりするのが楽しく実用的だと思いデザインしました。上の4点からずれなければ、多少の内容変更もありだと思います。

(4月30日提出メーリングリストより一部抜粋)

以上のデータの、「情報を得る」「外でも活用」「実用的」という言葉からも、教室での活動を外の世界と結び付けて、実用的な活動を行うことを目指していたことがわかる。また、

「自分の興味」という点から、教室での活動を参加者自身が興味のあるテーマ・題材で行おうとしていた点も見られる。「みんなで共有する」「だれでも参加できる」「友達をつくる」という言葉からは、一般的には教室の内と外もしくは教室内での教える—教わるとう関係になりやすい日本人と外国人、教師と学習者などを同じ教室内に対等なものとして取り込み、できるだけ実際の生活¹（教室外）と似た環境やコミュニケーションが起こるようにしたいと考えていたことがわかる。

これらのことから、4月の時点で筆者は「わせだの森」という教室で以下の3点を目標としていたことがわかる。

- ・教室での活動を外の世界（実生活）と結び付けて、実用的でリアリティのある活動を行う
- ・教室での活動を参加者自身が興味のあるテーマ・題材で行う
- ・様々な人を教室内に取り込み、外の世界（実生活）と同じような環境に近づける

つまり、筆者は参加者（個人）と教室外の世界とのつながりを作ろうと考えた。では、筆者がこのように考えた理由はなんだろうか。これには、今までに関わっていた日本語の教室で感じていたことが大きく影響しているように思われる。よって、ここで今までに関わった教室について振り返りながら、筆者が上記の教室観をもった経緯を分析していく。

日本語学校時代²

筆者は、2009年3月から約半年間、国内の日本語学校での日本語教育に携わっていた。日本語学校では、決められた教科書を決められたカリキュラムに沿って教えていた。その中で教科書の内容と学習者の生活状況や興味との違いに違和感を持つことがあった。進学や日本での生活を目的としている学習者に名刺交換などのビジネスマナーを教えることに意味があるのか、学習者のどのような生活と結びついているのかを熟慮せずに授業を行っていることもあった。違和感を持ちつつも、学校の制度や筆者自身の能力不足を言い訳に教科書の内容から離れられずにいた。

また、学習者の話を聞いたり様子を見たりして、学習者が学校以外の日本人と交流する機会がほとんどないことに憂慮していた。日本にいて日本語を使う環境が周りにあるのだから、もっと外の人々とつながってほしいという言語教育観を持っていたことがうかがえる。

以上のような思いから、より現実とのつながりがある実用的でリアリティのある教室を

¹ 実際の生活において上に述べたような対等な関係が起こっているとは限らないが、ここでは筆者の理想とする実際の社会という意味

² 日本語学校で勤務する以前にも TA（アシスタント教師）やチューター（個人教授）として日本語教育には関わっていたが、筆者自身が一つのクラス内において教室を運営しているという意識を持ったこの時代から振り返ることとする

つくりたいと思った。それは、学習内容を教室外で実際に使える実用的な内容にするというだけでなく、学習者と教室外の人とのつながりをつくるということであった。

中国中等教育時代

日本語学校での勤務の後、筆者は中国の中等教育機関で2年間、中学生と高校生への日本語教育に携わった。この教育機関では、上述の日本語学校にくらべて、カリキュラムや学習項目を筆者がある程度自由に決めることができた。しかし、日本国内とは異なり、教室の外で日本語に触れる機会もなければ、日本語を使うことも基本的にないので、学習者が日本語や日本を身近に感じる機会は少ないと感じていた。そこで、授業や課外活動を通して、少しでも日本を身近に感じられるようにしたいと思いながら活動をしていた。具体的には、日本の中等教育機関の教科書や写真アルバムなど生教材を多く使ったり、学習者自身が知りたい日本のことについて日本人教師にインタビューをするという活動を行った。

それらの活動をする中でしばしば考えていたのは、インターネットやプロジェクターなどの教室設備や教材が充実していたら、実際に日本や世界の人と交流したり、実際の日本の様子を写真やビデオで日本見せることができるのではないかということだった。そのような思いから、「わせだの森」では、インターネットやコンピュータの設備を利用して教室の外とつながるような活動をしたいと考えていた。

2.1.2. 「わせだの森」の中での変化

ここまで、筆者が最初に考えていた「自分の作りたい教室」を今までの経験をもとに分析した。もう一度、「わせだの森」開始時に考えていたポイントを振り返ると以下のとおりである。

- ・ 教室での活動を外の世界（実生活）と結び付けて、実用的でリアリティのある活動を行う
- ・ 教室での活動を参加者自身が興味のあるテーマ・題材で行う
- ・ 様々な人を教室内に取り込み、外の世界（実生活）と同じような環境に近づける

しかし、上述の「参加者（個人）と外の世界をつなげたい」という筆者の考えは、実際に「わせだの森」を設計し、運営する中で変化があったように思える。ここでは、他の実習生との話し合いデータをもとに筆者の教室観がどのように変化したのかを明らかにする。

「わせだの森」を設計するにあたって、まず、7人の実習生が提出した「私が作りたい教室」の課題をもとに話し合いをし、共通の理念を決めた。以下のデータは、共通の理念もしくはコンセプトについて話し合った際の議事録である。

実習生①：この間の話では、深いところでつながりをつくる、という感じが共通だったんじゃないかなと思うが？

実習生②：人と人とのつながり・・・。

筆者：活動を通じて何か得るものがある。

(2012/04/24 ミーティング議事録から一部抜粋)

ここでの筆者の発言では実用的な何か、もしくは参加者が活動の中で実生活に結び付く何かを持って帰ることを目標としていることが考えられる。先に述べた「参加者（個人）と外の世界をつなげる」と同様の考えである。

しかし、6月の筆者がメインファシリテーターを務める回（6月30日インターネット）に向けての話し合いの中では、多少の変化がみられる。以下は、6月20日のミーティングの議事録である。

筆者：イメージは森と家をつなげるだったが、ここまで来たら参加者同士のつながりを大事にしてはどうか。

(2012/6/20 ミーティング議事録から一部抜粋)

ここでは、参加者（個人）と外をつなげるという実内容的な活動よりも、人と人をつなげるということに重点を置いていることがわかる。つまり、参加者と参加者をつなげるという考えである。さらに、その翌週のミーティングでは、筆者自身が自分の考えの変化を次のように語っている。

筆者：この森の目標【ライフスタイル・価値観をインターネットを通して知る】

～中略～

ゲスト：インターネットの当初の発案理由は？

筆者：当初は違う考えで出した。森でサイトを紹介して、森で話したことが家でも使える、みたいなの。

～中略～

ゲスト：そのテーマでやりたいファシの思い、が参加者に伝わっているか。活動そのものではなく、ファシの思いが見えるか。

筆者：自分の中でも考えが変わってきている。グループで何か到達点を目指すことはしたい。

(2012/6/27 ミーティング議事録から一部抜粋)

上のデータの最初の発言によると、6月30日の「わせだの森」の目標を「ライフスタイル・価値観をインターネットを通して知る」というように設定している。自分のライフスタイルや価値観を他者と共有することで自己開示をし、他者とのつながりが生まれるということを想定していた。「グループで何か到達点を目指す」という発言からも、何かを得るということだけでなく、グループで協働し一体感をつくることに着目している。ここでは、参加者（個人）と参加者（個人）とのつながりというよりも参加者のグループ内での連携や一体感を目指すようになっていた。このような変化の背景には、他の実習生との対話・協働によって筆者の教室観に変化があったと考えられる。

3. 結論

3.1. まとめ

本稿では、「わせだの森」2012年春学期の前後における振り返りをもとに、筆者の考える教室観について分析及び考察した。当初考えていた「私が作りたい教室」では、学習者自身の興味がある内容で、実用的でリアリティのある活動を行うこと、参加者（個人）と教室の外とのつながりをつくることを考えていた。しかし「わせだの森」を設計・運営していく中で、参加者同士のつながりが生まれること、グループ全体でのつながりが生まれることと変化していった。また、「わせだの森」の終盤の7月頃には、参加者同士のつながりだけでなく、「参加者（個人）と日本語とのつながり」³という考えも生まれた。

「わせだの森」の開始時もくしはそれ以前から考えていた教室観は、他者との対話や実践を通して変化していった。しかし、当初考えていた教室観「参加者と外の世界とのつながり」に着目することがなくなったわけではなく、その考えに「人と人とのつながり」もしくは「人とことばのつながり」という観点も追加されたのである。教室の設計・運営を通して見えてくる教室観は、実践や対話、振り返りを通して変化・更新されていく。

3.2. おわりに

本稿では、筆者の教育観という観点から「わせだの森」や今までの日本語教育の経験を振り返った。当該授業を受講したことによって、自身の言語教育観や教室観が明確化され更新された。持っている教育観をどのように実践に結び付けるかという点では、担当教員をはじめ、他の実習生や過去の実習生、参加者からの多くの意見やアドバイスを聞くことができた。また、「わせだの森」の活動の中での自身の役割や参加者への振る舞い、具体的な活動案に関しても学ぶことが多かった。

今後、他の教室に関わる上でも、学習者にとって意義のある実践に結び付けていけるように、自身の教育観を問い直し更新し続けていきたい。

³ 筆者個人の教室観の変容という点では、表出しているデータが不足しているため、ここで大きくは扱わなかった

参考文献

松本裕典, 角浜ひとみ (2012). 2012 年度春学期「にほんご わせだの森」実践報告『地域日本語教育実践研究』7, 3-10. <http://www.gsjal.jp/ikegami/report07.html>

タカス コズエ (修士課程 1 年)

地域日本語教育実践研究
実践研究(1)報告集 2012 年度春学期
(通巻 7)

発行日 2012 年 10 月 31 日
発 行 早稲田大学大学院日本語教育研究科
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14
編集責任 池上 摩希子